

ノスタルジーを通じた伝統文化の継承

—岐阜県郡上市八幡町の郡上おどりの事例から—

足立 重和

(愛知教育大学)

現在、全国各地において、民俗芸能といった伝統文化を観光資源化しようとする動きは、地域づくりの主流になった感がある。しかし、観光化された伝統文化は、観光客の期待にこたえた文化形態であるため、地元住民からすれば違和感をともなうものになってしまふ。筆者が調査してきた、岐阜県郡上市八幡町の「郡上おどり」もそのような状況にあり、地元住民は自分たちの盆踊りを踊らなくなってしまった。だが現在、一部の地元住民たちは、観光化とは異なった方向で「郡上おどり」を受け継ごうとしている。本稿は、「郡上おどり」の事例研究を通じて、観光化とは異なった伝統文化の継承とはいったいどのようなものであるのか、を明らかにするものである。

一部の地元住民による、観光化とは異なる伝統文化の継承とは、次のようなものである。まず、住民たちは、観光化以前の“たのしみある”盆踊りの情景をなつかしむというありふれた日常的実践をくりかえす。このような主体を、本稿では「ノスタルジック・セルフ」と呼ぶ。この「ノスタルジック・セルフ」が、歓談のなかで“たのしみある昔の姿”を追求し、その“たのしみ”に向かって現にある盆踊りに様々な工夫を凝らしていくことこそ、本稿でいう伝統文化の継承にほかならない。このノスタルジックな主体性に裏づけられた伝統文化の継承は、現在の観光化と文化財保存の文脈のなかで画一化する伝統文化の乗り越えにつながっていくのである。

キーワード：郡上おどり、伝統文化の継承、ノスタルジック・セルフ、たのしみ

1. 「観光化される伝統文化」再考

現代日本の地域社会に住む人々にとっての最大の関心事は、いかにして自分たちの地域を活性化していくのか、という問いである。この問いをめぐって、自分たちの身近にある郷土芸能や民俗芸能といった「伝統文化」が1980年代後半から俄然脚光を浴びるようになってきた。その脚光の浴び方とは、かつてならば「古臭い」と一蹴され、衰退の一途をたどっていた伝統文化を、外部の観光客の期待にこたえるように観光化して地域づくりの契機にしていくものである。当然、ここでいう地域づくりとは、伝統文化の観光化によって、観光業による雇用の創出や若者の定着を具体的な目的として掲げている。

では、このような伝統文化をめぐる地元住民の動きに対して、われわれ研究者側は、いったいどのような分析を行ってきたのだろうか。ここでふれておかなければならないのは、特に人類学や民俗学で一つのトレンドともなっている「伝統文化の構成主義」(以下、文化構成主義)と呼ばれる分析視角である。この分析視角をもつ研究者は、伝統文化を通じた地域づくりの現状を次

のように捉えている。地域活性化のために、地元住民は、身边にある伝統文化を観光資源として位置づけるが、そのような外部の観光客のまなざしを意識した伝統文化は、歴史的に脈々と受け継がれた「真正な実体」ではなく、再構成された「虚構」である。しかし、観光の現場における観光客との相互作用を通じて伝統文化を構成していく過程のなかには地域づくりの契機となる「現地の人々の主体性」が見出されるのだ、と文化構成主義者は議論する（太田、1998；山下、1999；川森、1996；森田、1997）。つまり、文化構成主義者は、現在の地域づくりにおける観光の役割を重視しており、地元住民と観光客のあいだで生成する「観光化された伝統文化」を肯定的に捉えているのである。

確かに、このような一連の記述・分析は、地域社会の現状を的確に捉えたものであり、観光の場に現れた地元住民の主体性を鼓舞するかたちで、地域づくりに対する一定程度の実践性を有している。だが、この「観光化された伝統文化」という現象を、環境社会学における「歴史的環境保全」（片桐、2000；鳥越、1997；堀川、1998）という視角からながめるならば、継承すべき伝統文化そのものは、観光資源化という手段によって“延命”がはかられていると言えなくもない。つまり、歴史的環境にアプローチする環境社会学者は、観光化という地域社会の戦術・戦略に一定の距離をとってきたと言ってよい。

たとえば、片桐新自は、「歴史的環境を抱える地域を、そこでの日常生活をそのままにして丸ごと歴史博物館のようにとらえ、観光の目玉にしようという発想が各地で生まれつつある。しかし、こうした形での観光化が成功すればするほど、地域は観光にあわせた町へと変質していく可能性が高い。安易な形でのこうした発想の導入は、その地域社会の価値の本質を忘れさせ、観光客の期待するみやげもの屋と飲食店を中心とした『書き割り』のような町を生み出しかねない」（片桐、2000：16）と指摘する。また、鳥越皓之も、「そこに住む住民たちが自分たちの生活文化を形成しているのであり、観光資源を形成するのも地域活性化のひとつの方策として十分に首肯できる。ただ、地元の主体的な生活のあり方の模索と離れた基準が入りはじめると、なにやらあやしげになってくる」（鳥越、1997：255）と論じている。なぜこのような議論が可能になるのかと言えば、環境社会学者は、歴史的環境保全の核心が「地域社会の豊かさへの形成運動」（鳥越、1997：252）にあると考えているからである。あくまでも、観光化による伝統文化の継承は、環境社会学者にとってみれば、一つの手段にすぎないのである。

どうしてここで筆者が歴史的環境研究に言及するのかといえば、1997年からフィールドワークをしてきた岐阜県郡上市八幡町（旧・郡上郡八幡町）の「正調郡上おどり」（以下、「正調」）の現状を念頭においているからである。その現状とは、「地元の踊り離れ」である。地元住民は、観光化された「正調」に魅力を感じなくなり、踊り場に姿を現さない。そして、彼らは、筆者のような研究者に向かって、“どうしてこうなってしまったのか”，“いったいどうすればいいのか”といった問い合わせを発していくのである。このような現状は、小樽運河の保存を訴えてはじめは観光開発という方向で保存を実現させた住民たちのあいだで『『運河地区がよそよそしく感じられる』『浮ついた観光ブームでしかない』という市民の危惧』（堀川、1998：119）が醸成され、やがて『『観光開発ではなく住民にとっての真のまちづくりを』という意思表示』（堀川、1998：120）にいたるというところに通じるであろう。

だが、八幡町に住む地元住民は、ただたんによそ者に向かって嘆いているだけではなく、その

足立：ノスタルジーを通じた伝統文化の継承

ような状況に対して観光化とは異なる方向で自分たちの伝統文化を“静かに”継承しようとしていた。そこで、本稿では、岐阜県郡上市八幡町の「正調」を事例にしながら、観光化とは異なった伝統文化の継承とは、いったいどのようなものであるのか、を明らかにすることにしたい。この問いに答えることは、つまるところ歴史的環境への環境社会学的研究が基本においてきた「そこに住む人びとの心の豊かさ」（鳥越、1997：254）とはいいったい何なのかを考えるヒントになるだろう。

2. 保存の現場

2.1. 「正調」の概観

岐阜県郡上市八幡町（人口約1万6千人）の中心市街地にて、毎年7月中旬から9月上旬のうちの30日間の夜間（お盆の4日間は徹夜）に開催される「正調」は、「かわさき」をはじめとする10種類の踊り種目をひっくるめた盆踊りの総称である。毎年30日間ものロングランを、20団体ほどの自治会（氏子組織や顕彰会を含む）が主催者となって、回り持ちで開催している。ここで踊りの日の簡単なタイムスケジュールを紹介しておくと、各自治会は、自分たちの地区にある寺社やお地蔵さんの縁日に因んで、午後6時頃に地元住民を中心に神事を執り行う。神事終了後すみやかに、地元住民は、踊り会場の準備（移動式の踊り屋形の設置など）にとりかかる。午後8時からの踊りの開始には、現在「正調」の直接的な担い手で、約80年の歴史を有する地元有志中心の「郡上おどり保存会」（以下、「保存会」）が、大きな踊りの輪の真ん中に設置された移動式屋形（ここに三味線、太鼓、笛、歌からなるお囃子方が乗る）のうえから、「正調」のお囃子を演奏する。それをきっかけに踊りの輪が一斉に動き出す。その後、踊りは、様々な種目を踊り継ぎながら、午後10時30分（土曜日は午後11時）まで催される。踊りが終ると、主催者である自治会の会員たちは、後片付け（屋形の移動、掃除など）にとりかかり、それが済むと辺りはやがて静けさを取り戻す⁽¹⁾。

このように毎年開催されている「正調」は、古くは戦前から今日にいたるまで、八幡町にとって重要な観光資源として位置づけられてきた。特に、戦後の民謡ブームによって、多くの観光客が、「健全な娯楽」である「正調」を求めて八幡町に押しよせるようになる。地元住民の話によれば当初、「正調」目当ての観光客は、踊りをただ観るだけであったという。ところが、いつの間にか、そのような観光客は、踊りの輪に加わろうとするようになる。このような観光客を、地元の側もおおいに歓迎した。その地元の受け入れの姿が踊りの輪に大きな変化をもたらすこととなる。具体的に言えば、1953（昭和28）年以降、町行政や「保存会」は、それまで地元の者だけで少人数の複数の輪をつくり、地元住民皆が音頭を取り合いながら踊るという形態（地元では「昔おどり」と呼ぶ）を止め、現在のような、観光客をも巻き込んだ一つの大きな輪のなかに、お囃子屋形を置いて踊りを催すという形態に改めていったのだ。また踊りそれ自体に関しても、「保存会」は、踊りの輪に入りたい観光客の要望に応えるために、マニュアルを作成して踊り方の統一をはかったり、統一された型をマスターした観光客には踊り免許状を発行したりした。

これらの活動が功を奏し、現在では、夏期の踊りシーズンともなると約30万人もの観光客が

「正調」目当てに八幡町を訪れる。と同時に1996年、「正調」は、「国重要無形民俗文化財」に指定される。この指定によって、「わが国を代表する盆踊の一つとして芸能史上とくに重要なものであり、また、美濃北部山村の豊富な民謡を背景にした独特の手を伝えているなど、地域的特色的顕著な」（文化庁文化財保護部、1996：11）踊りスタイルは、ますます観光客の興味をひくこととなる。以上のような状況をふまえるならば、「正調」は、観光と保存という文脈に位置づけられた各地の伝統文化のなかでも成功例として位置づけられるだろう。地元住民にとっても、「正調」は、貴重な財産にちがいない。

2.2. 地元の踊り離れ

ところが、実際の踊り会場をのぞいてみると、地元住民は、「保存会」会員以外、ほとんど踊っていない。踊っているのはどのような人々かと言えば、仲間うちで盛り上がる観光客、近隣の市町村からマイカーでやってくる常連たち、踊り免許の取得を目指して揃いの浴衣で挑む都市部の民謡教室の一団などがほとんどである。では、当日主催者側にまわっている地元住民は、いったい何をしているのか。当日の踊りをたてている住民ですら、踊り本番になると一旦自宅に引き揚げ、そして終了間際になって再び会場入りし、踊りの輪が止むやいなや、踊り会場の後片付けをしはじめるといった具合である⁽²⁾。

それでは、踊りの本番のあいだ、地元住民（特に商店主たち）は、自らは踊らずに、観光客を相手にした商売に励んでいるのではないだろうか。だが、どうもそうでもないらしい。筆者からみれば、せっかくの踊りの日なのだから店を開けていてもよさそうな業種であっても、シャッターを閉めている店が意外と多い。このことは、当初地元の期待を一心に集めた東海北陸自動車道「郡上八幡IC」の開通（1996年4月）も大きく影響している。というのも、踊り会場で威勢よく踊る、観光客、常連、民謡教室といったよそ者は、踊りの本番に間に合うようにマイカーに乗って高速道路でやってきて、踊りが終わると日帰りで帰ってしまうからである。この高速道路の開通によって、郡上八幡は、旅行会社などが企画する観光コースにおいて「日帰り観光」「通過型観光」と位置づけられてしまった。このような観光の状況にあるので、特に踊りや観光に係わらない業種の商店主たちは、自分の商売がどうであれ、漠然と「町全体としては踊りで潤っている」という意識をもっているにすぎない。

以上のような「地元の踊り離れ」という現象は、当然担い手・後継者不足をひき起こす。具体的に言えば、地元住民は「保存会」に入会したがらないのである⁽³⁾。このことが実際の踊り場にも影響を及ぼし、八幡町議会でも、ある町議員が「郡上踊りの囃子の不評についてよく聞くが、郡上八幡の目玉商品である以上はその品質管理は最も重要である。対策についてもお聞きしたい」⁽⁴⁾と一般質問をする事態に発展した。この質問に対して、当時の商工観光課長は、「郡上踊りの件については深刻に受け止めている。来季以降そのようなことの無いよう対策を打っているのでご理解願いたい」⁽⁵⁾と答弁したが、その答弁にて具体的な対策は示されなかった。その後も具体的な対策がうたれなかつたのか、翌年、また同じ議員が「郡上踊りが最近踊りにくくなつたと言われている」⁽⁶⁾と切り出し、町行政はどのような対策を立てているのかを議会で再度問うた。それに対して、今度は町長が登場し、「歌い手の熟練者がいないことから、踊りにくいという声を聞いており、郡上踊り運営委員会、保存会で努力していただいている」⁽⁷⁾という答弁を行って

足立：ノスタルジーを通じた伝統文化の継承

いた。これらの行政側の答弁からわかるのは、町行政としては、「お囃子のレベル低下」に対して「保存会」に一任しているということである。

2.3. “ボランティア”がささえる保存のイデオロギー

このような議会でのやりとりをながめると、「お囃子のレベル低下」ひいては「地元の踊り離れ」を、町行政は、いったいどのように受け止めているのかが気になってくるところだろう。これらの点について、「お囃子のレベル低下」を「保存会」に任せている行政側は、「若干のお囃子のレベル低下」を認めたうえで、その原因が「囃しの名手A氏が亡くなったこと」による一時的なものだという見方を示している。このような見方にもとづいて、行政としては、「保存会」に対して「今は育成の時期なので、温かく見守っていく方向」にあるのだという。では、地元住民のいう「地元の踊り離れ」については、どうなのだろうか。この点について、行政側は、現代社会の「娯楽の多様化」が「地元の踊り離れ」に帰結しているのだと指摘する。どういうことかと言えば、かつてならば盆踊りが唯一の娯楽であったため、人々は踊り場に姿を見せたが、戦後からテレビなどの様々な娯楽がうみだされて、人々の興味が盆踊りに向かわないのだと語った⁽⁸⁾。

それでは、先ほど町議会にて問題視された「保存会」は、「お囃子のレベル低下」や「地元の踊り離れ」をどのように受け止めているのだろうか。まず、町議会での一連の一般質問に対し、「保存会」側は、「レベル低下はない」と反論しており、現在の「正調」が昔のままの姿を受け継いでいるという自信をもっている。現在の「保存会」の方針は、町行政のそれと同じく、現状のまま「正調」を保存・継承していくなかで八幡町の観光化との両立を図ろうというものである⁽⁹⁾。この方針は、「国重要無形民俗文化財」指定後に筆者がフィールドワークを開始した当初から全く変わりがない⁽¹⁰⁾。また、「地元の踊り離れ」についても、「保存会」側は、行政のいう「娯楽の多様化」が大きな原因であるとしながら、特に現代の若者にはお囃子などの技術を習得するのに必要な「上下関係を嫌がる」傾向があり、なかなか「保存会」への入会につながらないと頭を悩ませているという⁽¹¹⁾。

このように、町行政と「保存会」は、これまでの「保存と観光の両立」という路線を自明の前提と受け止めながら、「お囃子のレベル低下」「地元の踊り離れ」に対しては意に介さないといった姿勢であり、何らかの対策を講じる必要を感じてはいないのだ。だが、「お囃子のレベル低下」や「地元の踊り離れ」という住民の声が根強く存在しつづけるにもかかわらず、なぜ行政と「保存会」は、「とにかく自分たちは文化財を守っていくことを一つの使命としてやっていくわけであり……」といった決まり文句を唱えつつ、住民の声に耳を傾けようとはしないのだろうか。

そこには、郡上八幡という小さな町がかかえる、ある種の“行き詰まり”がある。現在、「保存会」には約70名が在籍しており、その70名が交代で1シーズン30日の全日程をこなしている。もちろん、会員それぞれに出席率は異なるが、少なくとも幹部たちは、ほぼ毎日踊り場に顔を出さなければならない。夏の暑い中、夜だけでもゆっくりと休みたいものである。だが、彼らは、それぞれの仕事や家事を終え、疲れた体を押して踊り場にやってくる。確かに、このような活動を担う人々は、八幡町民としての「使命」を背負った“ボランティア”である。このような“ボランティア”に頼らざるをえないのが、行政側の実情なのである。

当然ながら、彼らに対して、町行政は、「郡上おどり運営委員会」経由で「保存会」に「おど

り運営費」として年500万円（2003年度）の補助を出している。そのなかから、「保存会」は、会員一人一人に対して踊り場に出れば1日1000円の手当を支給している。単純に計算すれば、1シーズン30日で約3万円⁽¹²⁾を「保存会」会員は手にすることになる。たとえ手当が一人一人に支給されていたとしても、「たった3万円」である。これでは、毎日着用する浴衣のクリーニング代にもならない。このことは、会員自らが「私らボランティアでやっとるんやで」と言わせる金額と言えよう。行政側も「もっと（運営費を）増額したいのですが……」と申し訳なさそうであった。そのように1シーズンをなんとかこなしている“ボランティア”に向かって、「お囃子のレベル低下」や「地元の踊り離れ」までを“なんとかせよ”と言うことは、酷な話だろう⁽¹³⁾。行政も「保存会」もお互いに依存し合っている。

しかしながら、このような相互依存関係、なかでも「保存会」の“ボランティア”的行為に対して、皆（行政、一般の住民、そして保存会員自身）が何も言えないことこそ、「踊りを継承していくとは、どういうことか」という問い合わせを封じ込めてしまう。このような問い合わせの封じ込めの裏側で、「保存会」のような“ボランティア”団体は、観光化と文化財保存の文脈のなかで、「よその観光客のために」踊りの所作の統一にこだわってしまい、その一方で、「保存会」に属さない地元住民は、観光客にもすぐに踊ることができる型を踊らされた。観光客が押しよせる踊りの輪のなかに、もう自分たちがゆったりと踊る場所はない。ある自治会長のB氏（60歳代前半）は、「地元の人が踊りの輪に入る雰囲気ではない」と訴えていた⁽¹⁴⁾。

このように、一向に止まない「地元の踊り離れ」といった「正調」をめぐる“不安定さ”にもかかわらず、八幡町民としての「使命」をもった“ボランティア”という行為は、何ら揺らぐことがないのである。この“ボランティア”的行為を捉えて、われわれは、地元住民（特に「保存会」）が自分たちの伝統文化を守る気概を感じないわけではない。しかし、筆者はここに何らかの硬直化した“イデオロギー”的作動を見て取ることができる。このような硬直化したイデオロギーを、本稿では「保存のイデオロギー」と便宜的に呼んでおこう。とするならば、このような「保存のイデオロギー」の作動によって永続していく伝統文化を、われわれは、はたして“生きた状態”と言い切ることができるのだろうか。

3. ノスタルジック・セルフと伝統文化の継承

3.1. 日本民俗学の教え

それでは、「保存のイデオロギー」にささえられた「正調」の現状に対して、われわれは、いったいどのようにして乗り越えていくことが可能なのだろうか。この点について、柳田國男の主張は、たいへん示唆的である。やや長くなるが、引用しておこう。

まず我々のいちばん気遣っている弊害は、踊りは見せるもの、単に褒められるために踊るものと解せられて、せっかくの農村の自由な楽しみが、次第に職業の苦しみに変化して行くことである。能でも芝居でもその他の近世の舞踊でも、起原を尋ねてみれば、ことごとく素人芸であった。それがあまりに多勢から感心せられた結果、始終頼まれては演じているうち

足立：ノスタルジーを通じた伝統文化の継承

に、ほかの仕事に携わる余裕がなくなり、こればかりで生計を立てる必要上、収入を要求するようになると、勢い自分たちの面白くない時にも、なお空々しく踊らねばならぬ境遇になったのである（柳田、〔1926〕1990：473）。

この柳田の見方は、「正調」の現状に通じるところがあるだろう。特に、「保存会」会員から語られる「使命」や、“ボランティア”的な行為によってささえられた「保存のイデオロギー」が、この引用でいう「なお空々しく踊らねばならぬ境遇」を助長していると言えなくもない。

また、同様の指摘は、宮本常一の議論にも見受けられる。宮本は言う。「テレビで放送されると、その地方を訪れた観光客もそれを所望するようになって、観光用として復活したものの数は多い。……しかしそれによってもとの精神は忘れ去られている。……多くの民俗芸能は復活したけれども極端な言い方をすればみずからたのしむためのものではなく、人に見せるためのものになってしまったのである。だから人が見てくれなくなる日が来ればすぐやんてしまうであろうと思われる」（宮本、1967：201-202）と。

このような柳田や宮本の議論における示唆とは、次の2点である。まず1つめは、地元住民が「保存のイデオロギー」を乗り越えて自分たちの文化を“生きた”状態に戻すためには、自分たち本位の“たのしみ”を追求しなければならないということである。そしてもう1つは、「自由なたのしみ」や「もとの精神」を追求するためには、当該の伝統文化が住民にとって“そもそも本来あるべき姿とは何か”という時間的（歴史的）な問い合わせがなければならないということである。では、郡上八幡の住民たちにとって、“たのしみある=本来あるべき”盆踊りの姿とはいってもどのようなものであろうか。

3.2. “風情”をもとめるノスタルジック・セルフ

ただ、これら2点は、何も柳田や宮本から学ばなくとも、一般の地元住民ならば、自覚的であれ無自覚的であれ、ふだんから語り合っているようなことである。

【座談会】（1998年9月5日、B氏の自宅にて。踊りがすっかり変わってしまったという話題から。// = 割り込み。愛称は仮名。）

C氏（70歳代後半、主婦）：ほしてよ、行っても踊る場がないっていうんかな//

B氏：私の入る場がない

C氏：入る場がない

D氏（70歳代後半、主婦）：ほやもんで//

B氏：ほんで恥ずかしいような気がしてしまって//

C氏：ほんで、旅の人ばっかりやし、もうそれがよう、今年もウチ（C氏の娘さん）よ、K（愛知県のある都市名）からきたもんよお、踊りに行ったって、「今どれくらいの輪になっとるんや」って言ったら、昔はまだ二重ぐらいがよ、ふつうやった、ほいで、真ん中おって座つといでて、結構見れたんやで、（筆者を除く一同：そうやで）もう今、五重にも六重にやもんでもっとも、こんなんやな（このとき、C氏はギチギチで踊ることができないという動作を見せる），前の向かいの人がこんなんやで。

B 氏：踊っとるんやら、もう動いとるんやら。

D 氏：動きがとれん。

C 氏：動きがとれんねんで、踊るってことはないんや、おん。

B 氏：ざわめいとるだけ。

C 氏：ざわめいとるだけ。

B 氏：ほんで今の話で、あの、行ってみて「あら、Cちゃんも、Dちゃんも、おるんか、ちょっとオレも入るで」というような雰囲気がない。

C 氏：それやったんやな。

E 氏（60歳代後半、主婦）：踊りながら向かい側通なんいた人、「こっちおいで、おいで」。

B 氏：「いっしょに踊らんかな」、知った人が一人おったら、踊っとるとパッと入れるけど、ぜんぜん。

C 氏：私ら通りよってもよ、「おいおいおい」なんて「踊っとるんか」「うん」「じゃここへ」
//

D 氏：となりのナオちゃんね、ナオちゃんやイクちゃんやミッちゃん、みんな誘って行きよると、男の人ね、お友だちもね、「どこ行くんよ」や、「どこ行くんよって踊りよ」「行こ、行こー」ってなもんでね、「みんな男性、女性、男性、女性、きれいに入るんよ」なんてって、ほしてやったんだよ、ほらシュウーやったもん、雰囲気がね。

（この座談会の最後のほうでは、皆が口々に“なんとかしなければならない”と語り合う）

この歓談の参加者たち（B～E 氏）は、お互いに割り込んだり、掛け合ったり、反復したりしながら、いったい何を語り合っているのか。まとめると、彼らは、現在の観光化された「正調」と対比しながら、①“昔の”観光される以前の踊り場には顔見知りが必ず踊っていて声がかかった、②声がかかり地元の者ばかりで踊っていると踊り場が自然と秩序立っていて「雰囲気」がよかったです（＝D 氏の「『みんな男性、女性、男性、女性、きれいに入るんよ』なんてって、ほしてやったんだよ、ほらシュウーやったもん、雰囲気がね」という発話）と協働して語り合っているのだ。

特に、この歓談のなかで重要なのは、②である。【座談会】のような会話に地元住民が行き着いたとき、彼らは、②における「雰囲気」を、最終的には“風情”というフォークタームに置き換える（たとえば、「風情があった」という具合に）。筆者は、以前の論文（足立、2004）において、地元住民が“風情”と表現する審美的なアリティを体系的に記述したので、ここでは深くは立ち入らない⁽¹⁵⁾。ただ、引用した【座談会】からわかるることは、現在の観光化された「正調」への批判をきっかけに、「昔はこうだった」と住民たちがお互いに語り合うなかで、やがて皆でお互いを「ゆるやかに縛りはじめる」（三浦、1995：476）ということである。このような現状の伝統文化への批判を契機に過去をなつかしむ主体を、本稿では「ノスタルジック・セルフ」⁽¹⁶⁾と呼んでおこう。

3.3. ノスタルジック・セルフと理念上の過去

しかし、筆者が提示した「ノスタルジック・セルフ」には、重大な疑義がはさまれることだろ

足立：ノスタルジーを通じた伝統文化の継承

う。というもの、一般的に、ここで典型例として紹介された【座談会】は単なる年配者たちが“茶飲み話的”あるいは“後ろ向き”に、ノスタルジーを表明し合っているだけではないのかと疑問視されるからである。さらに、現在の社会科学のトレンドからすれば、このような年配者たちによる、一見すると政治的に中立で“無害な”ノスタルジーこそが「権力や利害関心に基づく特定の記憶や歴史像のヘゲモニックな調達のプロセス」(伊藤, 2002: 155) に途を開くことになる、といった懷疑的な議論が提起されるからである。

たとえば、カルチャラル・スタディーズの立場からメディア研究を行っている、伊藤守は、NHKの『プロジェクトX』という番組が「高齢者の視聴者にとっては自分の生きた時代を振り返るまたとない番組として視聴されている」(伊藤, 2002: 157) と指摘したうえで、「政治的なナショナリズムとは位相を異にしつつ、個人の過去の記憶を、われわれ『日本人』全体の記憶として、繋ぎ止めていくような、より深いレベルでのナショナリティの感覚が番組に体現されている」(伊藤, 2002: 161) と批判的に分析している⁽¹⁷⁾。もちろん、「ノスタルジー」という一点のみで、筆者がここでテーマにする盆踊りと『プロジェクトX』のようなメディア現象とを同じレベルで混同して論じることに一定の留保は必要である。だが少なくとも、現在の社会科学において、過去をなつかしむというノスタルジーには、自覚化されないナショナリストックな権力作用(ここでは、知らず知らずにナショナリズムに加担する「郷土愛」)が付着しているとみるのが主流のようである。確かに、そのような側面があること自体、否定できない。その意味で、ノスタルジーは“危うい”のだ。

しかし、民俗学者の井之口章次は、“昔をなつかしむ”というありふれた日常的実践のもつ意味を考え直すうえで、たいへん興味ぶかい「昔」の概念を提起している。井之口によれば、日本人が好んで用いる言葉である「昔」には、2つの意味があるという。1つは「歴史概念としての過去」(井之口, 1977: 6) であり、もう1つは「理念上の過去」(井之口, 1977: 9) である。まず前者の方からみていくと、こちらは、われわれにとって非常に常識的なものであって、連続的な一直線の時間軸に位置づけられた「昔」の概念のことである。

ところが、「昔」の意味は「歴史概念としての過去」だけにはとどまらない。それが、後者の「理念上の過去」である。井之口によれば、「理念上の過去」とは、「過去を美化してとらえようとする価値観」(井之口, 1977: 9) が入り込んでいるために、「昔に戻すことが、世直しのための、最良かつ唯一の手段だという考え方」(井之口, 1977: 10) に結びつく時間概念のことである。ただ、井之口の議論で興味深いのは、ただたんに昔の状態に回帰せよと言っているのではなく、そのような「昔」概念が「過去にあったかも知れないが、未来に築くべきもの」(井之口, 1977: 11) あるいは、将来の「努力目標で、……空想・夢想した世界」(井之口, 1977: 11) という性格を帯びるというところにある。このことをふまえるならば、先の【座談会】のような会話は、現在の踊りの状態と対比しながら「昔はこうだった」と語り合うなかで、会話に参加する皆を現状批判的にさせると同時に、自分たちの過去をなつかしみながら“たのしみある=本来あるべき姿”を未来に向かって築くために住民自らを動員させる可能性を秘めている。そのように考えると、「理念上の過去」とは、「過去と未来とを、現在が両断しているのではなくて、現在を中心にして、現在を包んで、その周囲に過去と未来とがある」(井之口, 1977: 11-12) という構造になっているのだ(次頁図1も参照のこと)。

事実、【座談会】でみられたような会話をふまえ、「保存会」とは異なった地元住民の有志が、日々に「これでいいかん」と語り、自分たちの経験を元手に「過去にあったかも知れないが、未来に築くべきもの」として、「正調」とは別の踊りイベントを開催するようになってきた。彼らは、「正調」の公式日程の合間にねって、様々な踊りイベントを催している。1996年9月、とあるお寺の境内で、「昔おどりのタベ」というイベントが、地元有志の手によって催された。このイベントにおいて主催者となった地元有志は、「原点に立ち返って」踊りを再興することを目的に、"風情ある" 戦前の踊りを再現しようと試みた⁽¹⁸⁾。そこでの踊りは、当然、屋形・お囃子・電気照明・マイクをいっさい使わない。参加者は、イベントの開始時に主催者代表の掛け声に合わせて祖先供養のために「切り子灯籠」に向かって合掌した後、自分たちで音頭を取り合いながら、思い思いに小さな輪が複数ある「昔おどり」を踊っていく。

また、2003年に新たに誕生した「子ども踊りのタベ」というイベントも、公式日程以外に催されたものの1つである。このイベント実行委員長のF氏は、自身も八幡出身の、50歳代の地元の開業医である。F氏は、「正調」の観光化によって、よその若者が元気よく踊っている反面、地元住民が踊り場からはじきとばされていることが「地元の踊り離れ」の原因であると感じていた。そんななか、他にもF氏と同じ思いをもっていた地元の有志たちがインフォーマルに集まり、「郡上おどり」のこれからを考える話し合いがもたれ、F氏もこれに参加した。この席上で、参加者一同、「地元の踊り離れ」なかでも子どもが全く踊り場に姿を見せないということが大きな問題として認識されるようになった。このとき、F氏を中心とする参加者たちは、「正調」の公式日程以外の1日を地元の子どもたちだけが踊る日にあててはどうかと提案する。この提案の背景にも、やはり“かつて”の踊り会場では子どもたちだけの踊り時間があったという“昔をなつかしむ”実践があったという。

このような発案に賛同する地元有志約10名が「実行委員会」を立ち上げ、2003年8月6日、踊り会場となる市街地の中心である商店街自治会の協力をえて、地元の子どもばかりが集う「子ども踊りのタベ」が実現する。当日は、地元の小・中学生のお囃子サークルが演奏するなか、色とりどりの浴衣を着た子どもたちが、親に付き添われながら、親や周囲の大人たちの踊りをみようみまねで踊っていた。そのあいだ、「実行委員会」の委員たちは、踊りにきた子どもたちに名前入りの「踊り免許証」を手渡すのにてんやわんやで、用意した350枚ほどの免許証は、すぐになくなるほどの大盛況であった。踊りの最後には、F氏自らが屋形に登り、踊りの閉めに歌われ

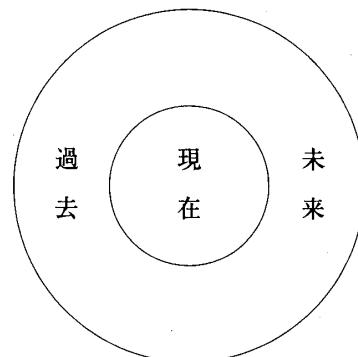
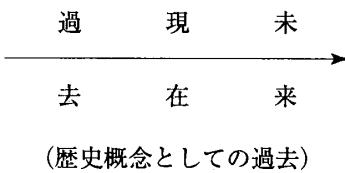


図1 「歴史概念としての過去」と「理念上の過去」
(出典) 井之口章次, 1997, 『伝承と創造——民俗学の眼』: 11より。

足立：ノスタルジーを通じた伝統文化の継承

る「まつさか」を歌いだす。次の日、F氏自身が屋形に登って美声を聴かせたことが、地元住民のあいだでちょっとした評判になっていた。

このように八幡町の現状をながめるならば、ノスタルジックな語りやセルフは、まんざら捨てたものではないと筆者は考えている。というのも、本稿でいう「ノスタルジック・セルフ」が自分たちの“昔”をなつかしみながら、“風情”といった自分たちの「生活感覚」（足立、2004：92）——地元住民のあいだでの、繰り返しの生活のなかから出現する、価値づけられた感受性——に行き着くとき、このようなノスタルジックな主体性に裏づけられた伝統文化の継承は、未来志向的で、創造的な方向に向かっていくからである。そうであるならば、「ノスタルジックな語りは、厳しい現状への慰めや癒しではあっても、未来へ向けた処方箋とは成りえない」（阿部、2001：176）ゆえに、「気分としての『ナショナルなもの』」（阿部、2001：176）に結びつきやすいと皮肉って、最終的に批判していくカルチュラル・スタディーズの見解は、結論をやや急ぎすぎているのではないだろうか。

3.4. ノスタルジック・セルフと盆踊りの“たのしみ”

その一方で、環境社会学における歴史的環境研究は、本稿でいう「ノスタルジック・セルフ」に近い現象に着目してきた。現在、歴史的環境研究のフィールドは町並みや遺跡といったハードな環境が研究の中心となっているのだが、これらの研究で特にポイントが置かれているのは、建築学的・歴史学的価値をもつ建造物や遺跡そのものよりも、地元住民がもつ「記憶」（吉兼、1996；関、1997）「経験」（牧野、1999）といった「精神的な豊かさ」（片桐、2000：2）あるいは「主観的な意味あい」（片桐、2000：3）のほうである。このような歴史的環境研究の注目点が、ひいてはそこに住む人々の生活の豊かさにつながっていくわけである。

なかでも、小樽運河保存運動を調査してきた堀川三郎は、保存運動を担っている住民たちが、都市計画で指定されているような、代替可能で均質な「空間」ではなく、「記憶や意味の詰まつた固有の〈場所〉」（堀川、2000：123）に執着していたことを指摘し、この事例研究を通じて「場所性」（堀川、1998）という概念を提出している。この概念をふまえて堀川は、「『小樽っ子の郷土愛』……といった土地や場所への執着は、戦後日本の社会学、とりわけ都市社会学的研究においては『封建的なもの』として相対的に軽視されてきたのではないだろうか」（堀川、1998：127）と問題を提起する。この堀川の議論は、本稿での筆者の主張と響きあうところだろう。

しかしながら、歴史的環境を主題にする環境社会学者のいう住民の「記憶」が本稿で注目するような「ノスタルジー」現象と同じであるかどうかについて、環境社会学者は、どうやらためらいを覚えているようである。そのためらいを細かく見ていくと、その反応には、次の2種類がある。まず1つめは、先ほどのカルチュラル・スタディーズと同様、ノスタルジーがナショナリズムと結びつくという議論である。たとえば、野田浩資は、歴史的環境研究における「過去を懐かしむという感情、もしくは、ノスタルジアの感情」（野田、2001：209）の存在を認めつつも、「歴史的ないし復古的な知識の産出と、『歴史的環境』の保護制度の成立の背景には、後進国である日本に向けられた『外からの視線』、そして、それに対応して近代化への反作用として生み出された広い意味での『ナショナリズム』の問題がかかわっていることにも気づいておかなければならない。『歴史的環境』の保護の主張は、グローバリゼーションの現代社会において『郷土の

誇り』や『ナショナリズム』という近代社会が置き去りにしようとしてきた『共同性』をめぐる議論にもつながっていく」(野田, 2001: 209-210)と指摘し, 「『歴史的環境』を論じる際に, 慎重な読解と冷静な議論を要する論点であろう」(野田, 2001: 210)と注意を喚起する。このような反応は先ほどのカルチャラル・スタディーズによるノスタルジー批判と同種類のものであるので, ここで筆者の見解を繰り返さないでおこう。

それよりも重要なのが, 環境社会学者による2つめの反応である。その反応は, 地元住民のあいだで展開するノスタルジーという現象が(一見すると)プリミティブであることに起因している。たとえば, 堀川三郎は, 「場所性」概念を論じた後, 「つまり, 保存運動の主張は単なるノスタルジーではなく, 都市計画によって不斷に〈場所〉が〈空間〉化されてゆくことへの抵抗であった」(堀川, 2000: 123)と結論づけている。この引用でわれわれが注目すべきことは, 「単なるノスタルジー」というように, この言葉が「つねに具体性と固有性をもっており, 意味や歴史, 地理的固有性と不可分の関係にある(〈場所〉としての土地)」(堀川, 2000: 123)よりも“軽く”位置づけられている点である。

しかし, はたしてわれわれは「ノスタルジー」をそのように捉えていいのだろうか。もちろん, 今までの歴史的環境研究が「開発か保存か」という地域環境問題の文脈でなされてきたという点を考慮に入れなければならないが, そうだとしても当該地域で歴史的環境の保全運動を担っている人々は, 筆者が引用した【座談会】のような“単なるノスタルジーに浸る”ことを自己規制してきたのだろうか。おそらく, われわれ社会(科)学者が危惧したり, 低く見積もったりする, 人々の「ノスタルジー」には, そこに浸らせてしまう何かがあるのではないかだろうか。それを突き止めるためには, 「ノスタルジック・セルフ」は, いったいどのような「記憶」をなつかしんでいるのか, をここで追う必要があるだろう。そこで再度, 八幡町の事例に立ち返ってみよう。

2003年8月31日, 先ほど紹介した「子ども踊りの夕べ」が行われた同じ会場で, 「“自治会対抗”郡上おどりコンクール」という催しが行われた。この催しも, 昨年からの初めての試みであり, この日の縁日おどりを担ってきた地元自治会が主体となって独自に企画したものである。このコンクール(=コンテスト)は, あくまでも地元市街地区の町内対抗形式をとっており, 各自治会の有志をその地区の代表に見立てて, 振いの浴衣をきて「正調」を踊る女性のグループ(5名)が町内対抗で“風情”を競い合っていた⁽¹⁹⁾。この催しの約1ヶ月前, この企画にかかわったG氏(50歳代女性)の話によれば, このような町内対抗形式を「町内対抗」というので, 昔にもどった」と評し, 「地元の人が踊ると踊りはこれから盛り上がるよ」「地元の人が踊ると踊りはよくなるよ」としきりに筆者に語っていた⁽²⁰⁾。そのG氏の発言どおり, 筆者が当日の踊りのようすをのぞいてみると, さすがに地元が主役とあって, 会場には, カメラやビデオをもった住民や, 自分たちの町内代表を応援する住民でおおいに賑わっていた。

ここで注目すべきことは, G氏が語る「昔にもどった」という評価である。この評価は, おそらく, 地元住民のあいだで現在の「正調」に対して不満を述べる際に「昔は……」と切り出しながら語り継がれる, 観光化以前の「昔おどり」の語り(足立, 2000: 139-140; 2004: 88-89)を範型にしていると考えられる⁽²¹⁾。というのも, その語りでは, かつての「昔おどり」において, 【座談会】でみられた地元の顔見知りばかりと協調して踊り場での秩序を「自然に」維持したうえで, 踊り手個々人や各自治会のレベルでの「競い合い」(たとえば, 踊りの輪の中での音頭の

足立：ノスタルジーを通じた伝統文化の継承

取り合い) が“風情”をうみだすものと表現されているからである。この「競い合い」には、現在の「正調」に見られる「踊りの所作の均一化」や「踊り方とお囃子方の固定化」を回避しながら、“誰が音頭をとるのかわからない”という「即興性」や「偶然性」を取り込むことを可能にしている。これらの要素を取り込んだ「競い合い」という“社会的なしきけ”こそが、地元住民にとって自己本位的で自由な“たのしみ”⁽²²⁾を誘発しているのである。昨年行われた「“自治会対抗”郡上おどりコンクール」がかつての「昔おどり」のようにどれほど地元住民に“たのしみ”を与えたのかは定かではないが、主催者たちが目指しているものは、かつてのような“たのしみ”ある踊りであることに間違はない。

この事例が示すように、地元住民は、現状の画一化した伝統文化を自分たち本位の“たのしみ”にもとづいて活性化しようとするとき、柳田國男が述べるように「大いに文化を改造しなければならないといふのは、要するに昔あつた部分をもう一遍そこを強くする、若しくは今まで用ゐなかつた部分を澤山に入れるとか、詰りは調和の仕方の變遷」(柳田, [1941] 1970: 200) におのずから向かわざるをえない。このとき、地元住民は、“たのしみある昔”に向かって、知らず知らずのうちにノスタルジーに浸ろうとする。地元住民による“昔をなつかしむ”というごくありふれた実践は、観光化とは異なる、自分たちの“たのしみある=風情ある”伝統文化の継承になくてはならないものである。言い換えれば、本稿でいう「ノスタルジック・セルフ」こそが、伝統文化の継承をささえていると言えよう。

このような踊りの“たのしみ”を住民自らが追求し、様々な工夫を重ねていくことは、観光化と文化財保存の文脈のなかで「保存のイデオロギー」の働きで永続し、画一化し、停滞していく伝統文化を乗り越え、自分たちの伝統文化を“生きた状態”にしていくのである。

4. 歴史的環境保全としての伝統文化の継承

本稿では、岐阜県郡上市八幡町の「郡上おどり」を事例にしながら、観光化とは異なった伝統文化の継承とはいったいどのようなものであるのか、を明らかにしてきた。まとめると、八幡町に住む地元住民は、観光化されすぎた「正調」に対して、“自分たちのもの”という感覚を失いつつあり、それを何とか食い止めようとしている。このとき、住民たちは、字義どおり“これは伝統文化である”ということで、ただたんに踊りの技術や型を厳格に伝えようとするのではなく、まずはかつての“風情=たのしみある”盆踊りの情景をなつかしむというありふれた日常的実践をくりかえすのである。このような主体を、本稿では「ノスタルジック・セルフ」と呼んできた。この「ノスタルジック・セルフ」が自分たち本位の“たのしみある昔の姿”を追求し、それにもとづいて未来志向的で、創造的に工夫を積み重ねていくことこそ、本稿でいう「歴史的環境保全としての伝統文化の継承」ということにほかならない。このノスタルジックな主体性に裏づけられた伝統文化の継承は、現在の観光化と文化財保存の文脈における「保存のイデオロギー」によって画一化する伝統文化の乗り越えにつながっていくのである。

ただ、本稿での伝統文化の継承論は、現在の「保存のイデオロギー」の乗り越えだけにとどまらない。どういうことか。それは、そもそも、常に自分たちの文化をよりよくしていこうという、

われわれの願いに通底するものがある。この点について、柳田國男は、次のように述べている。

文化は如何なる場合に於ても楽しいものであるといふことであります。楽しい生活、この世の樂しみ——昔の人の言つた言葉で、今日われわれの言ふところの文化といふ言葉に近いと考へて居ります。楽しい生活こそは文化の本來の姿であり、それをもう一段とより高くすることが文化の向上となるものだと私などは思つて居ります（柳田、[1941] 1970 : 201）。

この柳田の主張を引き受けるならば、冒頭で紹介した歴史的環境保全の核心となる「そこに住む人々の心の豊かさ」とは、自分たちの文化のなかにどれだけ“たのしみをうみだす社会的なしき”を組み込むことができるかにかかっているということになるだろう。このような主体性概念や継承論を議論してきた本稿の立場からすれば、観光の現場で発揮される状況的な主体性を鼓舞する文化構成主義者の議論は、どことなく“場当たり的”⁽²³⁾にうつるのである。地域の豊かさや活性化を論じる際、われわれ社会学研究者は、常に経済や生業の観点からのみ論じなければならない、ということではないだろう。そのような観点から地域活性化を論じている裏側で、われわれは、観光化という戦略が、外部者への“わかりやすさ”にこたえるかたちで当該の伝統文化を画一化・規格化してしまう側面を見逃してしまうのである。要するに、われわれは、絶えず「地域の豊かさとは何か」を問いつづけなければならないのだ。

今回取り上げた事例は、岐阜県郡上市八幡町の、しかも盆踊りをめぐる事例ではあったが、筆者としては、環境社会学が対象とする自然環境や歴史的環境の保全においても、その地域社会の「遊楽性」（菅、1998 : 245；松田・古川、2003 : 235）がポイントになるべきだと考えている。それを可能にするためには、まず、地元住民のあいだで、おのずから湧き上がってくる、“昔をなつかしむ”というありふれた実践を見逃してはならない。ここで重要なことは、われわれ環境社会学研究者は、ノスタルジーから分析的に距離をとるのではなく、そのような現象が地元住民のあいだでどのように未来志向的=文化創造的になっていくのかを、フィールドワークから明らかにしていくことではないだろうか。

注

- (1) このタイムスケジュールは、地元で「縁日おどり」と呼ばれる日程の一日を紹介したものである。お盆の4日間は、市街地の中心にて、徹夜で踊られる。地元ではこれを「徹夜おどり」と呼ぶ。この4日間は、会場となる自治会が踊りの準備や後片付けを担当するが、神事などは特にない。
- (2) この点については、1997年12月～1998年4月のあいだに筆者が行った、踊り主催自治会の会長あるいは担当者（1997年度の主催23団体のうち20団体）に対する聞き取り、および1998年、2000年、2001年、2003年の踊り日程への参与観察にもとづいている。
- (3) ここまでに至るためには、3つの歴史的な流れが介在していた。これらの歴史的流れとは、1923（大正12）年の「保存会」設立前後からはじまる、①盆踊りの神聖化、②観光化、③家元化の3つである。詳しくは、足立（2004: 87-88）を参照のこと。
- (4) 2001年12月21日、八幡町議会第7回定例会での井藤一樹議員（民主党）の発言から。
- (5) 2001年12月21日、八幡町議会第7回定例会での商工観光課長（当時）の発言から。

足立：ノスタルジーを通じた伝統文化の継承

- (6) 2002年9月10日、八幡町議会第4回定例会での井藤一樹議員の発言から。
 - (7) 2002年9月10日、八幡町議会第4回定例会での小森久二男町長（当時）の発言から。
 - (8) 2003年12月5日の町役場産業振興課係長（当時）への聞き取りから。
 - (9) 2003年12月5日に実施した「保存会」副会長への聞き取りから。
 - (10) たとえば、1997年11月6日に実施した当時「保存会」副会長で現・会長への聞き取り。
 - (11) たとえば、1997年10月24日、当時「保存会」会長（故人）への聞き取りから。
 - (12) この「全日程出席すれば3万円」という数字は概算であり、ここに皆勤賞などが加わり、実際にはもう少し多い。会員の最高金額は、1シーズン10万円である。この会員（1名）は、屋形の管理のために、全日程を通じて、真っ先に屋形を移動できるように準備し、最後の最後に屋形に幌をかける仕事に従事している。
 - (13) しかし、住民のなかには、たとえ数万円とはいえ、貴重な町税を支払っている以上、「プロ意識」をもって「地元の踊り離れ」に対して何らかの努力をもとめる人々も存在する。また、一部の住民のなかには、「保存会」という“ボランティア”団体に町行政が依存しすぎているのであって、「踊り離れ」を食い止めるためには、役場内に踊り専門部局の設置や、責任をもって踊りを保存・継承できる知識や技術をもった専従スタッフを雇い入れるべきだ、という声もある。
 - (14) このB氏は、筆者が踊り研究者であることを知るやいなや、自分も「正調」に対して言いたいことがあり、同じ思いをもつ友人も連れてくるので、一度皆の話を聞いてほしいと、筆者に聞き取りの機会を与えてくれた。これによって、後に紹介する【座談会】が成立した。
 - (15) 住民が表現する“風情”に必要なものとは何か。以前の論文では、次の2点を指摘しておいた。まず1つめは、踊りの輪のなかで美声を聴かせる者同士、あるいは、地区独自の飾り付けで踊りの日を盛りたてる自治会同士のあいだで競い合わなければならない（だが、最終的には、それらの競い合いは、ひとつのかたちに統合されねばならない）。2つめは、踊り（の日）を担うにあたって、何も言わずとも皆で“自然に～する”“自然に～なる”“自然に～できる”ということがなければならない（たとえば、事前に何の申し合わせもないのに、踊りの最後にはそれに相応しい種目を踊ったり、ある地区に住む手先の器用な人が決まって作り物を製作したりする、など）。詳しくは、足立（2004：88-90）を参照していただきたい。
- なお、以前の論文（足立、2004）では盆踊りを活用した地域づくりに力点を置いて論じたのに対して、本稿では、新たなデータを盛り込みつつ、盆踊りという伝統文化の継承そのものがどうあるべきなのか、またその際にどのような主体が立ち現われるか、という点にポイントを置いている。
- (16) 本来ならば、複数形で「ノスタルジック・セルブス」とすべきところだが、日本語でのとおりを考えて、「セルフ」としておく。
 - (17) その他にも、『プロジェクトX』をめぐるカルチュラル・スタディーズからの同様の分析には、阿部（2001：168-176）がある。
 - (18) この「昔おどりの夕べ」というイベントの主催者のあいだでも、【座談会】のような会話があったという。なお、本稿では、【座談会】のような会話を典型例として位置づけている。
 - (19) その他にも、2003年度の踊り日程では、自治会単位での地元住民による催しや企画が目白押しであった。ここでは特に、2003年8月20日の「本町宗祇水神祭」にて新たに始まった「ゆかた姿コンテスト」をあげておこう。これらの自治会対抗のコンクールやコンテストに、「保存会」幹部も審査員として積極的に協力している。
 - (20) 2003年7月23日にてG氏から教示を得た。
 - (21) また、先ほど紹介した【座談会】に登場したB氏は、【座談会】の後、八幡町自治会連合会の中心的な役職に就任し、各自治会が独自に企画する踊りイベントを鼓舞する立場にある。この「“自治会対抗”郡上おどりコンクール」に対しても、B氏は、主催する自治会の会長を通じてエールを送っていた

という。

- (22) ここでの“たのしみ”をもう少し特定化するならば、それは、マイナー・サブシステム研究でいう、狩猟・漁撈・採集活動のなかの「深い遊び」(菅, 1998) に通じるものがある。これらの活動に従事する人々は、お互いに対象物を獲得すべくしのぎを削る。このとき、競い合いが「熱情」(松井, 1998: 259) あるいは「加熱」(飯田, 2002: 26) をともないつつ「活動そのもののもつ魅力自体が目的化され、その目的こそが、生業を始めたり継承したりする原動力たりうる」(菅, 1998: 246) ような“たのしみ”がそこにある。このような自己目的化した“たのしみ”に行き着くために地元住民がノスタルジーに浸ることは、カルチュラル・スタディーズによるノスタルジー批判が問題視する「郡上八幡人」ひいては「日本人」の誇りというものとストレートに結びつかないように思われる。
- (23) 文化構成主義者の一部は、つくられた伝統文化を「観光文化」と名づけ、文化構成主義的な視角の延長線上に「観光文化論」を展開している(橋本, 1999; 2001; 川森, 2001; 橋本・佐藤, 2003)。観光文化論者は、各地の伝統文化の『観光化』が逃れられぬ流れなら、意識的に生活の場を『観光』の領域から区別する必要が生じる(橋本, 1999: 233)と議論し、この区別があくまでも地元住民の側から意識的・操作的・戦略的になされると分析する。そして、彼らは、「地元の人たちが操作できる空間のなかにとらえなおされた『観光文化』は、支配的な力が日常生活に容赦なく浸透してくることに対する防波堤として機能する」(川森, 2001: 80)と論じている。このように、文化構成主義から観光文化論にかけて、彼らのいう「現地の人々の主体性」は、ますます観光の現場に限定された、状況的な主体性を議論する傾向にある。

文献

- 阿部潔, 2001, 『彷徨えるナショナリズム——オリエンタリズム／ジャパン／グローバリゼーション』世界思想社.
- 足立重和, 2000, 「伝統文化の説明——郡上おどりの保存をめぐって」片桐新自編『シリーズ環境社会学3歴史的環境の社会学』新曜社: 132-154.
- , 2004, 「地域づくりに働く盆踊りのリアリティ——岐阜県郡上市八幡町の郡上おどりの事例から」『フォーラム現代社会学』3: 83-95.
- 文化庁文化財保護部, 1996, 「新指定の文化財」『月刊文化財』399: 4-42.
- 橋本和也, 1999, 『観光人類学の戦略——文化の売り方・売られ方』世界思想社.
- , 2001, 「観光研究の再考と展望——フィジーの観光開発の現場から」『民族学研究』66 (1) : 51-67.
- ・佐藤幸男編, 2003, 『観光開発と文化——南からの問いかけ』世界思想社.
- 堀川三郎, 1998, 「歴史的環境保存と地域再生——町並み保存における『場所性』の争点化」船橋晴俊・飯島伸子編『講座社会学12環境』東京大学出版会: 103-132.
- , 2000, 「運河保存と観光開発——小樽における都市の思想」片桐新自編『シリーズ環境社会学3歴史的環境の社会学』新曜社: 107-129.
- 飯田卓, 2002, 「旗持ちとコンブ漁師——北の海の資源をめぐる制度と規範」松井健編『講座・生態人類学6核としての周辺』京都大学学術出版会: 7-38.
- 井之口章次, 1977, 『伝承と創造——民俗学の眼』弘文堂.
- 伊藤守, 2002, 「公共の記憶をめぐる抗争とテレビジョン」伊藤守編『メディア文化の権力作用』せりか書房: 152-174.
- 片桐新自, 2000, 「歴史的環境へのアプローチ」片桐新自編『シリーズ環境社会学3歴史的環境の社会学』新曜社: 1-23.
- 川森博司, 1996, 「ふるさとイメージをめぐる実践——岩手県遠野の事例から」清水昭俊ほか編『岩波講

足立：ノスタルジーを通じた伝統文化の継承

- 座文化人類学 12 思想化される周辺世界』岩波書店：155-185.
- , 2001, 「現代日本における観光と地域社会——ふるさと観光の担い手たち」『民族学研究』66 (1) : 68-86.
- 牧野厚史, 1999, 「歴史的環境保全における『歴史』の位置づけ——町並み保全を中心として」『環境社会学研究』5 : 232-239.
- 松田素二・古川彰, 2003, 「観光と環境の社会理論——新コミュニナリズムへ」古川彰・松田素二編『シリーズ環境社会学 4 観光と環境の社会学』新曜社 : 211-239.
- 松井健, 1998, 「マイナー・サブシステムの世界——民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹編『現代民俗学の視点 1 民俗の技術』朝倉書店 : 247-268.
- 三浦耕吉郎, 1995, 「環境の定義と規範化の力——奈良県の食肉流通センター建設問題と環境表象の生成」『社会学評論』45 (4) : 469-485.
- 宮本常一, 1967, 「民衆の生活と放送」『宮本常一著作集 2 日本の中央と地方』未来社 : 195-206.
- 森田真也, 1997, 「観光と『伝統文化』の意識化——沖縄県竹富島の事例から」『日本民俗学』209 : 33-65.
- 野田浩資, 2001, 「歴史的環境の保全と地域社会の再構築」鳥越皓之編『講座環境社会学 3 自然環境と環境文化』有斐閣 : 191-215.
- 太田好信, 1998, 『トランスポジションの思想——文化人類学の再想像』世界思想社.
- 関礼子, 1997, 「自然保護運動における『自然』——織田が浜埋立反対運動を通して」『社会学評論』47 (4) : 461-475.
- 菅豊, 1998, 「深い遊び——マイナー・サブシステムの伝承論」篠原徹編『現代民俗学の視点 1 民俗の技術』朝倉書店 : 217-246.
- 鳥越皓之, 1997, 『環境社会学の理論と実践——生活環境主義の立場から』有斐閣.
- 山下晋司, 1999, 『バリ 観光人類学のレッスン』東京大学出版会.
- 柳田國男, [1926] 1990, 「郷土舞踊の意義」『柳田國男全集 18』筑摩書房 : 471-479.
- , [1941] 1970, 「たのしい生活」『定本柳田國男集 第三〇巻』筑摩書房 : 187-202.
- 吉兼秀夫, 1996, 「フィールドから学ぶ環境文化の重要性」『環境社会学研究』2 : 38-49.

付 記

本稿は、日本スポーツ社会学会第13回研究大会公開シンポジウム「新たな観光開発と地域社会——北海道におけるアウトドア体験観光をみすえて」(2004年3月26日、北海道教育大学旭川校)にて報告した内容に大幅な加筆・修正を加えたものである。

(あだち・しげかず)